

# 「国産」

産材と外材では六対四くらいの割合で国産材が多いですね。大島石（愛媛県）がメインですが、万成石（岡山県）や最近では天山石（佐賀県）もよく出ます。

商談の際には、基本的に必ず国産材を提案しています。見積もりは、国産の高級品、少し高い中級品、そして外材と、三種類は提示します。国産材のよさを説明すると、お客様も最初は予算がないといっておられても「では中クラスのものにしよう」と国産材に決めていただくことが多いです。建立後の安心を考えれば、低価格のものだけを提案するような売り方は「どうかな？」と疑問に思います」

石半・伊藤石材店の四代目・伊藤岳夫さんは



四代目・伊藤代表

力を受けながら次第に自分なりのやり方を見つけていくが、相当の苦労があったに違いない。

「滋賀県石材組合連合会・青年部の先輩や仲間の力が大きかったですね。先輩には本当にたくさんのお話を教えていただいています」

伊藤さんは青年部長を務めた経験もあり、冒頭の国産材の販売も青年部に所属して学んだことの一つだという。普段の仕事ではみんなライバル同士だが、「お客様のために、安売りする

## ■いま注目の企業ルポ■

# いしを商う目

全力で最高の仕事を目指す。  
不易流行の精神を貫く老舗店

石半・伊藤石材店 (滋賀県彦根市)

そいう。現在四十歳で、先代の他界により平成二十一年に後を継いだ。創業は明治二十八年（二八九五）、百二十年以上の歴史を有する。伊藤さんは幼少期から先代の仕事を見て育ち、「いざれ後を継ぐ」と思いながらも一度は好きだった自動車整備士の道へ。自身の結婚のタイミングなどもあり二十三歳のときに家業に就いた。

「私から『石屋の仕事させてほしい』と頼みました。先代から『継げ』といわれたことはなかったのですが、きつと待っていてくれたと思います。母が亡くなり、一年経たないうちに父も亡くなり、最初は不安も多かったですが、両親の生前から働いてくれていた職人二人と、母の代わりに手伝いに来てくれていた叔母に助けられましたね」

同店では寺院墓地での仕事がメインだが、宗派の違い等により覚えることの多いお寺との付き合いも、当初は「上手に対応できていなかったと思うところもある」と伊藤さん。周囲の助



JR彦根駅すぐにある伊藤石材店。店舗には大島石、天山石、万成石、庵治石、真壁小目などの墓石製品が展示されている。石製のひこにゃんがお出迎え！

のではなく、いいものを買らないとダメだ」と、とても大切なことを教えられた。いまお店には前記の石種の他に庵治石、真壁小目などの墓石製品を展示し、国産材を積極的に提案するが、そのスタイルは伊藤さんが四代目を継いでから築き上げてきたもの。青年部の仲間のアドバイスが大きかったという。

といっても、四代続く老舗店だから以前から国産材の実績はある。二代目までは岡崎産の石を多く使い、先代も大島石などを使ってきた。

「建立実績があるので年数を経ても変質の少ないことがわかり、それがお客様にとっての一番の安心材料になります。また当店ではリフォーム工事も多いですが、国産材なら建立して二十年、三十年経った墓石でも、表面を切削して研磨し直せば、新しく建てたお墓のようにきれいになります。石の内部まで風化していない



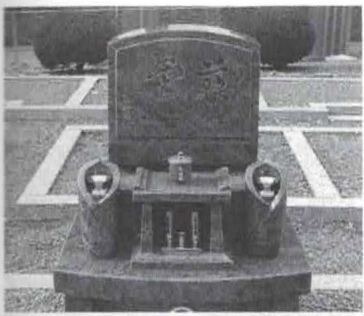
【上】市内にある工場。切削、研磨、穴あけ機があり墓石の加工やリフォームなどに稼働する。今後は文字彫刻も自社にて行う予定です。【下】大島石の墓石。基礎から完成までの工事工程写真を撮影し、お客様に贈呈する。



んです。そういうことも説明して、『将来まで安心ですよ』と伝えていきます」

そのお客様の安心をさらに高めるのが、市内にある自社工場の存在である。もともと墓石本体を加工することは少なく、巻石（外柵）加工が中心だが、いまもできるだけ巻石の加工は自社で行ない、またリフォームや再研磨、修復工事などの際にも自社工場に対応する。

「これは当店に限らず、滋賀のものもとの石屋さんは『売る意識』より『つくる意識』のほうがまだまだ高いと思います。とにかく『いいものをつくりたい』と。それはお客様のため、お客様のご子孫のため。そこを軽んじては絶対いけないと思っています」



洋型デザイン墓石。正面文字「慈雲」はお寺のご住職が揮毫し、故人の好きな鯉の彫刻を置く

いまはインターネットに情報があふれ、他社との比較のためか、現場の案内もなく見積もりだけを依頼されることもある。しかし同店ではそれに応じて安売りするのではなく、つくる意識を大切に持ち続けている。

「お客様のために全力で最高の仕事を指したい。お客様もお寺様もその姿勢を必ず見てもらえるし、きつと感じてくださるはずです。自分の仕事でよろこんでいただければ、それが何よりのやりがいです」

近隣の京都や名古屋では樹木葬や納骨堂などが開設され、多様化の波は着実に迫っているものの、彦根周辺ではまだお寺の墓地を中心とした埋葬・供養が根強いという。だからこそ、石材店としていま何をすべきなのか。石材店の仕事の核となる一番重要な部分を守り続けるその姿勢には学ぶべきことが多いといえる。

さて、同店の仕事は墓石だけではない。建築工事の実績も多く、神社、寺院での境内整備の石工事が多いのは石工としての信頼の証である。特に多賀大社（滋賀県多賀町）の「平成の大造営」（平成十四年～同十九年）では正面参

経験、そして職人気質が伊藤石材の「石」の思いを聞いた。となりました。

「とにかくいま、自分が一生懸命に仕事をし、その仕事を少しでも残していきたい。そしてもしも私の子どもや孫がそれらを見て『いい仕事だな』『やりがいがあるな』と思ってくれば、それでいいかなと思います」

伊藤さんはそう答えた。実直な姿勢に、石工魂を見たように思う。

この「不易流行」は特に先代が大切にしていたものだが、取材を通して着実に四代目にも受け継がれていることが感じられた。

最後にこれからの百年を見据えて、次世代へ

◎石半・伊藤石材店  
滋賀県彦根市佐和町6-14  
TEL0749-23-7930  
<http://www.itosekizai.com>



多賀神社（多賀町）平成の大造営での正面参道の敷石工事



鳥居の移設修復工事（地元・菅原神社）



寺院境内の石工事。参道は新規のサビ石を使用した石垣等は既存の石を再利用した



個人邸の外構石工事施工と石積み作業の様子